

陸に上がる勇氣

——クレア・キーガン作「波打ち際（の近く）で」
“Close to the Water’s Edge” のテキスト改訂をめぐって

谷田 恵司

概要

“Close to the Water’s Edge,” a short story by the Irish writer Claire Keegan, was originally published in 2001 in the United States as an addition to the stories in *Antarctica*, the author’s first collection of short stories. This collection was first published in the United Kingdom in 1999. In 2007, the aforementioned short story was substantially revised when it was included in her second collection of stories, *Walk the Blue Fields*. Through the comparison between the old and new texts, Keegan’s artistic labor will be highlighted, in order to indicate the possibility of various thematic interpretations.

キーワード：アイルランド短編小説、テキスト改訂、家族、性的指向、母親の選択 (Irish Short Story, Text Revision, Family, Sexual Orientation, Mother’s Choice)

1 はじめに

(1) 本論の目的

アイルランドの小説家クレア・キーガン Claire Keegan (1968 -) の短編小説「波打ち際（の近く）で」¹ “Close to the Water’s Edge” を検討する。最初にこの作品がいつどのような形で出版されたかの出版史を確認する。こ

の作品は最初に第1短編集で出版された時のテキストが、第2短編集に収録される際には大幅に改訂されている。次にその改訂の内容を確認するとともに、それによって作品の読みの可能性がどう変化しているかを検討する。こうした作業の結果を踏まえて、この作品について、そしてこの作家について何が言えるのかを考えてみたい。

この作品を選んだ理由を述べる。まずこの短編はどこでどういう形で出版されたかが一見すると見えにくいいため、それを整理してまとめる必要がある。次に、この作品のテキスト改訂を具体的に検討して改訂が作品の読みの可能性をどのように広げているかを考えることは、この作家の特質を知るひとつの手掛かりになると思われるからである。

(2) 作家紹介

クレア・キーガンは1968年に生まれた。アイルランド東部のウィックローの農場で育ち、高校卒業後にアメリカ南部のカトリック系の大学に通い、現在はアイルランドに住んでいる。最初の短編小説集 *Antarctica* は、ロサンゼルス・タイムズの「ブック・オブ・ザ・イヤー」に選ばれ、ウィリアム・トレヴァー賞も受賞した。第2短編集 *Walk the Blue Fields* は、イギリスとアイルランドで出版された最高の短編小説に与えられるエッジ・ヒル賞を受賞した。

キーガンは自分の執筆活動を続けているだけでなく、後進の指導も重要な活動と考えて、作家（志望者）に対してのワークショップや講演会などを主催している。Claire Keegan Fiction Writing Courses というサイトを見ると、たとえば以下のようなコースが開催されたようである。

5-Day Residential Writing Course with Claire Keegan

Teach Bhride Holistic Education Centre Tullow, Co Carlow

Jan 2-6, 2022

Fee 900 euro (meals and accommodation included)²

(3) 作品紹介

この作家は比較的寡作で、現在までに出版されている作品は以下のようなものである。

Antarctica, 1999

Walk the Blue Fields, 2007

Foster, 2010

(この作品は *An Cailín Ciúin* (The Quiet Girl) として Colm Bairéad 監督・脚本により 2022 年にアイルランド (ゲール) 語で映画化された。)

The Forester's Daughter, 2019

(上記 *Walk the Blue Fields* 所収の短編を単行本として出版したもの。)

Small Things Like These, 2021

(これは 2022 年 8 月現在、2022 年ブッカー賞のロングリスト 13 点の中の一つに選ばれている。ちなみに、ブッカー賞のサイトでは「116 ページで、これはいままでブッカー賞の候補となった中で一番短い本である」と紹介されている³。いかにも短編作家キーガンの面目躍如と言ったところである。もちろん、この作家は今後長編を書く可能性もあるので⁴、今のところは短編を中心に活躍している作家とみるべきであろう。)

(4) この作品について

「波打ち際 (の近く) で」 “Close to the Water's Edge” の内容を簡単に紹介する。主人公は大学生である。時代設定は 1980 年代と思われる。場所はアメリカ南部。主人公は大学の夏休みの間、母の再婚相手の百万長者が持つ海辺のコンドミニアムに滞在している。母はハーバード大学に通う息子を自慢し溺愛している。息子は保守的な継父が苦手である。母と継父が彼の誕生日をレストランで祝う。ピンクのケーキを食べた後で主人公はその店を一人で立ち去り、夜の浜辺で服を脱いで泳ぎだす。砂州まで泳いだら休憩して戻ろうと考えていたが、そこは満ち潮で水没している。足が届かずパニックになるが、何とか浜辺に戻る。服は波にさらわれている (ここで

2001年版は終わっている。以下は2007年版による)。彼は近くのヨットに干してあったTシャツを盗んで下半身を覆い、コンドミニウムに戻る。継父はそんな彼の姿を見て声をかける。主人公は航空会社に電話して、大学のある町に戻る飛行機の便を予約しようとする。

2 出版史

(1) *Antarctica*

キーガンの最初の短編小説集 *Antarctica* (1999) がイギリスで出版された際には、“Close to the Water’s Edge” はそこに収録された15編の中には含まれていなかった。この短編は *Antarctica* がアメリカで2001年に出版された際に16編目の収録作品として付け加えられた。2001年のアメリカ版では、収録作品の掲載の順序も大幅に変更された。以下に両書籍の目次を示す。作品の前の番号は論者が便宜的に付したものである（以下同様）。

Antarctica

1999年

London: Faber and Faber, softcover (paperback with a dust wrapper)

- 1 *Antarctica*
- 2 *Love in the Tall Grass*
- 3 *Where the Water’s Deepest*
- 4 *The Ginger Rogers Sermon*
- 5 *Storms*
- 6 *The Singing Cashier*
- 7 *Burns*
- 8 *Quare Name for a Boy*
- 9 *Ride if You Dare*
- 10 *Men and Women*
- 11 *Sisters*

- 12 A Scent of Winter
- 13 You Can't Be Too Careful
- 14 The Burning Palms
- 15 Passport Soup

2000 年

London: Faber and Faber, paperback. 内容は 1999 年版と同一。

2001 年

New York: Atlantic Monthly Press,⁵ hardcover

() 内の番号は 1999 年 Faber 版における配列順を示す。

- 1 (1) Antarctica
- 2 (10) Men and Women
- 3 (3) Where the Water's Deepest
- 4 (2) Love in the Tall Grass
- 5 (5) Storms
- 6 (9) Ride if You Dare
- 7 (6) The Singing Cashier
- 8 (7) Burns
- 9 (8) Quare Name for a Boy
- 10 (11) Sisters
- 11 (12) The Scent of Winter*
- 12 (14) The Burning Palms
- 13 (15) Passport Soup
- 14 Close to the Water's Edge
- 15 (13) You Can't Be Too Careful
- 16 (4) The Ginger Rogers Sermon

*"The Scent of Winter" はタイトルが 1999 年のイギリス版の "A Scent of

Winter”から変更されている。本文にもごくわずかな違いが見られる。

(2) *Walk the Blue Fields*

キーガンの第2短編集『青い野を歩く』*Walk the Blue Fields* (2007) を見ると、収録作品合計7作の中に“Close to the Water’s Edge”がある。*Antarctica* からここに再録されたのはこの作品だけである。これが再録された理由として考えられるのは、イギリスの読者にとってこの作品はわざわざアメリカ版の *Antarctica* を購入しないと読むことができなかった作品であるからであろう。イギリス版の *Antarctica* を読んだ読者にとっては、これは重複ではないのである。さらに、2008年にイギリスで出た *Walk the Blue Fields* のペーパーバック版では、2007年の版にもう一つ“The Long and Painful Death”が追加されて計8作となっている。しかし、この作品集のアメリカ版の初版は2008年に出ているが、その内容は2007年のイギリス版の収録作品合計7作のままであり、“The Long and Painful Death”は含まれていない。以下にそれぞれの目次を記す。

2007年

London: Faber and Faber, softcover

- 1 The Parting Gift
- 2 Walk the Blue Fields
- 3 Dark Horses
- 4 The Forester’s Daughter
- 5 Close to the Water’s Edge
- 6 Surrender
- 7 Night of the Quicken Trees

書籍巻末の“Acknowledgements”には以下のような記載がある。“An earlier version of ‘Close to the Water’s Edge’ was published in *Birthdays Stories*, The Harvill Press, selected and edited by Haruki Murakami.” (163)

2008年

New York: Black Cat⁶

- 1 The Parting Gift
- 2 Walk the Blue Fields
- 3 Dark Horses
- 4 The Forester's Daughter
- 5 Close to the Water's Edge
- 6 Surrender
- 7 Night of the Quicken Trees

2008年出版であるが、収録数と各短編の配列は2007年イギリス版と同じである。

2008年

London: Faber and Faber, paperback

()内の番号は2007年版における配列順を示す。

- 1 The Long and Painful Death
- 2 (1) The Parting Gift
- 3 (2) Walk the Blue Fields
- 4 (3) Dark Horses
- 5 (4) The Forester's Daughter
- 6 (5) Close to the Water's Edge
- 7 (6) Surrender
- 8 (7) Night of the Quicken Trees

ここで、作品集冒頭に“The Long and Painful Death”が加わり、2007年版の合計7作から一つ増えて計8作となる。作品の配列としては、これが冒頭に加わって2007年版の7作が一つずつ位置がずれただけである。“Close to the Water's Edge”のテキストは2007年版と全く同じである。

(3) 邦訳

『青い野を歩く』(岩本正恵訳 白水社 2009年) 所収。

著作権表示(目次の前のページ)は以下のようにになっている。

WALK THE BLUE FIELDS by Claire Keegan Copyright © Claire Keegan
2007, 2008

これにより、この邦訳は2008年版をもとにしていると確認できる。2007年の初版に収録されていなかった「長く苦しい死」も含まれている。

本邦訳では2008年イギリス版とは作品配列が変更になっている⁷。以下に目次を示す。()内の番号は2008年イギリス版における配列である。

- 1 (2) 別れの贈りもの
- 2 (3) 青い野を歩く
- 3 (1) 長く苦しい死
- 4 (4) 褐色の馬
- 5 (5) 森番の娘
- 6 (6) 波打ち際で
- 7 (7) 降伏
- 8 (8) クイックン・ツリーの夜

(4) *Birthday Stories*

“Close to the Water’s Edge”は村上春樹が編集した、誕生日にちなんだ短編小説を集めた作品集である *Birthday Stories* にも所収されている。この作品集の出版史も確認しておきたい。この本は最初に日本語で出版されたため、日本語版と英語版の両方のエディションを時系列順に掲げる。

2002年

村上春樹編訳『バースデー・ストーリーズ』中央公論新社

11編収録。“Close to the Water’s Edge”は含まれていない。

2004年

Murakami, Haruki. ed. *Birthday Stories*. The Harvill Press

“Close to the Water’s Edge”を含めて12編収録

巻末の Acknowledgements には以下のように記載されている。

“Close to the Water’s Edge” in *Antarctica* by Claire Keegan: © Claire Keegan 2001” (184)

この情報からここに収録された“Close to the Water’s Edge”の初出が2001年の *Antarctica* であることが確認できる。

2006年

Murakami, Haruki. ed. *Birthday Stories*. Vintage

収録作品は13編。2004年版の12編に Lewis Robinson “Ride” が加わっている。

2006年

村上春樹編訳『バースデイ・ストーリーズ』(村上春樹翻訳ライブラリー)
中央公論新社

Vintage版(2006)の13編収録。クレア・キーガン作「波打ち際の近くで」は *Antarctica* の2001年版をもとにした翻訳である。

3 比較検討

(1) テキストの改訂・変更

キーガンは“Close to the Water’s Edge”を第2短編集 *Walk the Blue Fields* (2007) に収録する際にテキストにかなりの変更を加えていて、アメリカ版 *Antarctica* (2001) に収録されたテキストと *Walk the Blue Fields* にあるテキストにはかなりの違いがある。2001年版と2007年版を比較すると、単なる変更だけでなくかなりの追加が見られ、全体の単語数も20パーセントほど増加している。あまりに変更箇所数が多く煩雑になるのですべての変更

点を網羅することはできないが、作品理解に関わると思われる点をいくつか指摘して検討する。

自分の作品を機会があるごとに加筆修正する作家は決して珍しくはない。作家は何らかの理由で、もっとも一般的な理由としてはより優れた（あるいは自分にとって満足のいく、理想に近い）作品に仕上げるために、手を加える。検閲や出版社の意向等の外部の圧力によって自主規制や修正をせざるを得ないという場合もある。ここではそうした可能性も踏まえたうえで、改訂によってテキストに何が加わり、何が消えたのか、それをまず記録・確認し、その変更の意味と効果を検討し、そして読者の側から見るとそれがどういう読みの可能性を生み出しているかを探ってみたい。

さらに、想定される作者の意向として別の考え方がありえる。作者が舞台として設定した国や文化圏ではないところに居住する読者に対する配慮としてのテキストの修正はよく見られることである⁸。さらに言えば、イギリス版とアメリカ版の併存（つまりイギリス人読者とアメリカ人（およびより広い文化圏の）読者に向けた2種類のテキストの並列的存在）を作家が目指している（あるいは容認している）可能性もある。その場合、作家が時間的にあとで書いたテキストの方が、作家にとってより完成された、理想に近い創作物であると決めつけることはできない。

また、アイルランド文学における口承文芸の伝統を考えたとき、話し手、聞き手やその場の雰囲気などによって話が変わり、語るたびに内容に変化が生じる、ということ自体が当然のこととして受け入れられている。橋本楨矩は、アイルランドで短編小説が発達した理由の一つは「口承の伝統である」として「かたりべ語部」の存在をあげ、「肉声によって語られる物語は、絶えず作り替えられ、語り直されて、いくつものバリエーションを生み出していく」(384-85) と述べている。それを踏まえて考えれば、こうした改訂は、いわばここにも口承の伝統が生きているあかしだとも言えよう。

(2) 具体的変更点とコメント

以下それぞれの項目は、出版年、相違箇所、ページ数、そしてその変更に関する簡単なコメントである。全体的テーマに関わると思われる変更については指摘にとどめ次項で後述する。

2001: beer and Coppertone (162)

2007: Diet Coke and Coppertone (93)

ダイエット・コークはアメリカで1982年の夏に発売された。後述するようにこの作品の時代設定はおそらく1982年であるから、これはまさに市場に出たばかりの商品であった。ビールがダイエット・コークに変更されたことで、そうした時代性がより明確に示されている。またこの飲料は“private strip of sand” (2007: 93) という特権的な場所で日光浴する者たちの、時流に乗った健康への関心とそれを裏付けする経済的豊かさを示している。テネシー州の養豚農家でブタの世話で苦勞してきた祖母や母との対比で見ると、この海辺の若者たちの様相はまさに都市の高度消費社会の姿である。

2001: なし

2007: It's ten years since the ban on DDT came into place (93)

アメリカでは1972年にDDTの使用が禁止された⁹⁾。そうすると、ここでの時代設定は1982年と思われる。ダイエット・コークと合わせて、特に若者や高額所得者に健康や環境への意識が芽生えて、それが一部の企業や社会的レベルで共有され始めた時代であることが示されている。

2001: his stepfather, the millionaire (163)

2007: his stepfather, the Republican (94)

主人公の継父の人物像がより明確に示されている。アメリカの共和党支持者が一般的にどういう人物像であるかを読者が承知していることを前提

にした改訂であろう。

2001: "Will you fix my tie?" he asked. (165)

2007: なし

息子から母にたのんでネクタイを締めてもらうという、甘えるような態度を削除したことで、この母子の関係がより距離のあるものになっている。

2001: "Did you hear about this guy Clinton? Says if he's elected president he's gonna let queers into the military," he says. (166)

2007: President のPが大文字。あとは同じ。(97)

ビル・クリントンの大統領在職は1993年から2001年まで。そうするとこれは1992年の大統領選挙かそれ以前のことはずであり、上述のDDT禁止から10年(つまり1982年)という記述と少しずれがある。

2001: "... How come you never bring a girl down?" のあとは主人公が言い返そうとした描写なし。(167)

2007: '... How come you never bring a girl down?'

At this point, he could say something. He composes a retort, decides to speak, then looks at his mother and hesitates. His mother's eyes are pleading for his silence. (99)

ここに彼が同性愛者であるというサブテキストが隠されているとみることが可能だろうか。この点については後述する。

2001: "Make a wish, honey!" his mother says. (168)

The young man closes his eyes and makes a wish, then blows hard, extinguishing the candles.

2007: 'Make a wish, honey!' his mother cries.

The young man closes his eyes, and when his eyes are closed, he realises

he does not know what to wish for. It is the unhappiest moment of the day so far but he blows hard, extinguishing the candles. (99)

「願い事をして、ろうそくを強く吹き消す」よりも、「何を望んだらいいのかわからない」描写の方が、この若者が生き方の方向性を見いだせない様子が明確に示されている。

2001: “Happy birthday, son,” the mother says and kisses him on the mouth. He tastes lipstick, stands, and he hears himself thanking them for a pleasant birthday. He hears his mother calling his name, the waiter saying, “Good evening, sir,” at the doorway. (168)

2007: ‘Happy birthday, Son,’ she says, and kisses her husband on the mouth.

The young man stands up and hears himself thanking them for a pleasant birthday. The lights come back on and then he hears his mother calling his name, the waiter saying, ‘Good evening, Sir,’ at the door. (100)

主人公が母の口紅の味を感じた、というところはいかにも生々しく実感がこもる。それがきっかけで立ち上がってその場を去ることにしたわけだから、これは彼にとってかなりの衝撃だったのだろう。上述のように、彼が母にたのんでネクタイを締めてもらう場面も2007年版で削除されている。母子の肉体的接触の描写を減らしたと思われる。彼の性的指向を考える手掛かりとなりえる点を削除したことは、あまり強く暗示するのを避けたと考えることができよう。

2001: He is crossing the highway now, finding a space between the speeding cars. Other college kids are drinking beer on the promenade, watching the bungee jumpers throwing themselves into midair, screaming. (168)

2007: He is crossing the highway now, finding a space between the

speeding cars. The other college kids are out on the promenade. He stands for a moment and watches a bungee jumper throwing herself into mid-air, screaming. She dangles for a while above the ground until a man comes over and takes her harness off. (100)

まず“finding a space between the speeding cars”は彼の身の置き場のない状況を暗示していると読める。これは2つの版とも同じである。その直後のバンジージャンプをしている人の描写は、細部だが実に効果的に改訂している。2001年版では“the bungee jumpers”と複数形で、さらに、それを見ているのも彼ではなくてほかの大学生たちである。2007年版では“a bungee jumper”となっていて、2001年版の複数形の一般的な描写よりもより個別の明確な存在として提示されている。それにより、この女性が宙に浮いていて係員の男性に助けをもらうまで何もできない宙ぶらりんの状況と、それを彼が見ている様子が印象的である。バンジージャンプでは、最初に飛び降りるには勇気がいるが、飛び降りた後は係員が来るまでただロープにぶら下がっているだけの存在になる。男性係員に助けられるまで無力に待つ女性の様子は、彼の祖母の海岸での出来事を思い起こさせる。海岸に行った祖母も、結局は夫に連れて帰ってもらうことを選ぶしかなかった。それ以外の選択肢はその時の彼女には見えなかった。そしてもちろん、ぶら下がっている女性の姿は、彼自身の宙ぶらりんな状態も暗示している。

2001: 主人公は19歳 (169)

2007: 主人公は21歳 (100)

この2歳の差によって、この主人公がいつまでも学生でいることはできずに、否応なしに大学卒業後の生き方を見据える必要のある、より切羽詰まった設定になる。

2001: He will never marry; he knows that now. (169)

2007: なし

はっきり言うことは避けて、彼の性的指向というテーマを少しぼかしたのか。

2001: 主人公がやっとの思いで浜辺に泳ぎ着いたところで作品が終わっている。(170)

2007: そのあと、服が潮に流されて見つからないので、全裸の体を隠すため近くの船から干してあったTシャツを盗んで自分の腰を覆い、継父の家に戻り、シャワーを浴び、大学に戻る飛行機の便を予約するために航空会社に電話するところで終わる。

4 作品の評価

(1) アメリカが舞台であること

この作品が評価される際には、アイルランド作家がアメリカを舞台にした作品を書いているという事実を避けて通るわけにはいかないようである。イギリスの *The Guardian* の書評では、この作品集の中のアメリカを舞台にした作品が、アイルランドを舞台にした作品と比較して劣っているとは見ていない。

Keegan writes other stories in an American idiom which sounds natural and faultless to my ear. Whatever the region, she offers whole swathes of experience of it: its offbeat characters, crackling dialogue, rituals, secrets, seasons. (McCann)

しかし、アメリカの *Los Angeles Times* の書評には以下のように書かれている。

That's not to say this story collection is flawless. Oddly enough, Keegan, who studied for a time in New Orleans, occasionally misfires when

she uses the United States as a locale: Four of these tales seem the unfortunate result of watching too many Sean Penn movies because they are cornball accounts of honky-tonk lives, full of divorcees and guys named Butch. On the other hand, Keegan's "Love in the Tall Grass" is the best short story this reviewer has encountered in a month of Sundays and as many book reviews. (Griswold)

ここでは、“Love in the Tall Grass”を高く評価しながらも、アメリカを舞台にした他の4作品に関しては「ショーン・ペンの映画を見すぎたのではないか」と手厳しい。このできの悪い4作品に「波打ち際（の近く）で」も含まれるようである。

(2) 主人公の性的指向

この作品の3人称の語り手の視点はおおよそ主人公に寄り添うものであるが、彼の周りの出来事は詳細に描写されても、彼の内面はごくわずかな例外を除いてほとんど描かれていない。それゆえ主人公がホモセクシュアルであるかどうかは、テキスト上の証拠としては不十分ではっきりとは言い切れない。しかし、そうであると仮定して読むと、作品の抱える緊張がより緊迫したものとなる。そしてこの作品を、自分の性的指向に戸惑って生き方を見失っている若者の彷徨を描いた物語と見ることができる。

作品冒頭で母と継父の激しい口論が主人公に聞こえてくるシーンがあり、それは語り手（ここでは主人公の意識にかなり近い視点）からは、“It is an old story.” (2001: 163) と描写される。母は夫に“Don't bring it up.” (2001: 163) ときつい口調で警告している。2007年版も全く同じテキストである。この口論の原因が主人公の性的指向であると推定することも可能であろう。

また、2001年版で継父が主人公に“Why, when I was your age I had a different woman every weekend.” (167) と言って、自分の考える男らしさを押し付ける場面を見てみよう。母親は夫の言葉を聞いてすぐさま“These

olives! ... Taste these olives!” (167) と口をはさんで話をそらす。この母は息子がホモセクシュアルである可能性を認識しているのだろうか。

2007年版では、主人公は継父に“*How come you never bring a girl down?*” (99) と言われて言い返す言葉を考えるが、母のまなざしを見て結局は口を開かない。そのあとで母の“*Taste these olives!*” (99) が来る。ここには母と息子のいわば共犯関係とも言えるほどの精神的つながりが見える。この生まじめな主人公は継父に対してどのような返答を考えていたのか。自分の性的指向を偏見に満ちた継父に正直に告げるとは思えない。母はすでに息子の苦しみを承知していて、ただ彼に夫の財産を継いでもらいたいので沈黙を強いているのであろうか。

(3) 2007年版の結末

作家はなぜ2001年版の、浜辺に泳ぎ着いたところで終わる結末をさらに延長して、部屋に戻って帰りの航空券を予約しようとする2007年版の結末を付け加えたのだろうか。これはどのような効果を生んでいるのか。主人公がやっとのことで浜辺に戻った際に、彼は海から最初に陸に上がった生物を想像する。“*He imagines the first species that crawled out of the sea, the amount of courage that took.*” (2007: 101)。このイメージは両方の版にある（文章はほんの少し変わっている）。彼の祖母が言ったように、海の深さはわからないのだから、人は地上で生きるしかない。それはこの若者も同じで、男性と女性でできているこの社会で生きていかざるを得ない。彼は帰りの航空券を予約しようとするが、大学に戻ってもそこは一時的な滞在場所に過ぎず、いずれは世に出て行かなければならないことを承知している。それは、結局は陸に上がらねばという諦観であり、またさらに最初に陸に上がった生物の勇気を自分も持たねばならぬという決意であると読み取ることもできよう。

主人公が裸体を隠すためにTシャツで下半身を覆う様子は“*like a diaper*” (2007: 102) と（主人公の視点から）描写されている。継父はこれを見て、

まともに服を着ないで帰宅したことを性的放縦ととらえ、それを自分の価値判断で好意的に解釈する。作家はなぜもう少し大きなTシャツや半ズボンを手に入れる展開にしなかったのか。ここでオムツという言葉で示される幼児性は、勇気を出して海から地上に上がった生まれたての生物というイメージにつながり、彼が危うく死にかけるまでの水の体験を経て、いわば水によって浄化され生まれ変わったという解釈も可能だろう¹⁰。

5 まとめ

“Close to the Water’s Edge”をGoogleで検索すると、この作品を分析した小論文が載っているサイトがいくつか見つかる。中にはデンマーク語のサイトもある。それらは学術論文を紹介するサイトではなく、高校生や大学生から有料で小論文をダウンロードさせるサイト、つまり、宿題の代行業といった商業サイトである¹¹。

こうしたサイトの倫理や違法性はさておき、こうしたものがちょっと検索すると大量に見つかるということは、この短編は高校などで短編小説の分析の課題用によく扱われているのだろうか。たしかにこの作品には、母と息子の関係、母親の再婚後の継父と子どもの関係、大人になること、男女の関係や結婚、性的指向など、特に若い世代には切実なテーマが多く含まれていて、課題作品として選ばれるのも十分ありえるかと思わせる。この作品を読んで、漠然とした不安を抱えながら生きる主人公に共感を覚え、その「最初に陸に上がった生物の勇気」というイメージに心を揺さぶられる年若い読者は少なくないだろう。

家族、特に母と子の関係はアイルランド文学の一つの特徴的なテーマであることがしばしば指摘されている。Claudia Luppinoはキーガンの短編作品における新旧の要素を論じて次のように述べている。

The condition of women within the family and in society has been another key theme of Irish fiction. This has implied a confrontation

with, and a questioning of, the symbolism traditionally associated with women in Irish literature, as well as an “updating,” as it were, of fictional female portraits in the light of the secularization and globalization of Irish society and of the increasing presence and weight of women in the public sphere. Mother figures, in particular, have been substantially modified, and the impact of their choices on their children has been put under scrutiny. (2)

ここで注目したいのは、「母親の選択が子どもたちに与えるインパクト」というテーマである。これはキーガンの他の作品においてもさまざまに様相を変えて語られる主題の一つとなっている。本作品においては、まず第一に主人公の祖母の、夫とともに海岸から帰宅するという選択は、主人公の母が生まれるという結果を生み、さらにその母は主人公の父と離婚し、百万長者と再婚している。母は息子に “You play your cards right and this could all be yours some day.” (2007: 96) と言ってそのコンドミニアムを指し示す。あなたのためを考えてあの男と再婚したのだと。これを主人公はどう受け止めているかはテキストには書かれていないが、それが重荷であることは十分に推測される。家族の在り方はアイルランドの文化の大きなテーマの一つであるとして、Luppino は以下のように述べる。

[the family] has constantly been a major concern for Irish prose writers, who have explored family relationships in a large range of situations, usually moving along the family’s two constituent axes of gender and generation. (2)

家族をジェンダーとジェネレーションという二つの構成要素からなるものと見なす考えを受けて本作品を見ると、ここでも2世代にわたる母と子の関係がある。社会的に期待される性役割の強制や混乱（祖母は夫から去

らなかったが、母は離婚し再婚した。息子は性的指向に悩んでいる）と世代間の（非）継続性とが入り混じってこの物語の横糸や縦糸となり、それが主人公に大きな精神的影響を与えている。こうした点でも、この作品には新人作家キーガンの目指した伝統と革新の出会いが各所で見られると言えよう。

キーガンはあるインタビューで以下のように語っている。

“A lot of my work goes into taking any traces of my labours out,” says Keegan, when I talk to her in Edinburgh, a few hours after she gave a reading at the city’s book festival. “It’s essentially about trusting in the reader’s intelligence rather than labouring a point. To work on the level of suggestion is what I aim for in all my writing. There are so many things the short story cannot do; it’s by learning those limitations that I am cornered into writing what I can”. (O’Hagan)

ここで作家は自分の苦心の痕跡を消し去ることによりかなりの手間をかける、と述べている。作家は自分の言いたいことを無理に表現しようとするよりも、読者の知性を信頼して暗示のレベルで語ることを目指している。本論文はそうした作家の苦労の跡をあえて探りだそうとする試みである。これはもしかしたら作家から読者への信頼を損ねる行為なのかもしれない。しかし、いったん書き上げたものにさらに手を入れた痕跡をたどることで、作家のいわば職人技ともいえる語りの巧みさが可視化され、その結果として作品中により明確に見えてくるものがあり、読みの可能性が一層深まるとしたら、本論考にもいくばくかの意義があると信じたい。

注

1. この作品には後述するように邦訳が2種類あり、題名がそれぞれ「波打ち際の近くで」（村上春樹訳）と「波打ち際で」（岩本正恵訳）となっているため、こうした表記を用いた。
2. <https://ckfictionclinic.com/>
3. <https://thebookerprizes.com/the-booker-library/books/small-things-like-these>
4. キーガンは長編小説の第2章と称する“Salt: The Second Chapter”を2002年に雑誌に発表しているが、その長編そのものは今のところ出版されていない。
5. Atlantic Monthly Press は後に Grove Press となる。
6. タイトルページ裏の著作権情報では、Black Cat は“a paperback original imprint of Grove/Atlantic, Inc.”であると記されている。
7. 邦訳で収録作品の配列が変更された理由について、『青い野を歩く』の出版元である白水社の編集部に問い合わせたところ、明確な回答は得られなかった。
8. たとえばJ・K・ローリング J. K. Rowling の『ハリー・ポッターと賢者の石』*Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997) がアメリカで出版された際には、テキスト中のイギリスの文化的背景に基づく多くの語句などが出版社の意向によりアメリカの年少の読者のために変更され、タイトルですらアメリカ版では*Harry Potter and the Sorcerer's Stone* と変更されたことはよく知られている。
9. “The United States banned the use of DDT in 1972.” CDC (アメリカ疾病予防管理センター), https://www.cdc.gov/biomonitoring/DDT_FactSheet.html
10. 「水」はキーガンの他の作品においても、再生や復活とつながる要素として、あるいは超自然的な力を持つものとして見られる。たとえば

*Foster*では、主人公の女の子を一時的に預かる夫婦は、溺死した息子の服をその女の子に着せ、井戸に連れて行って水を飲ませる。『青い野を歩く』所収の「クイックン・ツリーの夜」では、「足洗いの水」についての妖精物語の一節が冒頭に置かれて話が始まる。

11. 以下にその例を示す。

<https://www.studienet.dk/close-to-the-waters-edge/analysis>

<https://studymoose.com/close-to-the-waters-edge-by-claire-keegan-essay>

引用文献

Griswold, Jerry. "The News From Elsewhere." *Los Angeles Times*, 8 Jul. 2001, <https://www.latimes.com/archives/la-xpm-2001-jul-08-bk-19640-story.html>

Keegan, Claire. *Antarctica*. Faber and Faber, 1999 (softcover).

———. ———. ———, 2000 (paperback).

———. ———. Atlantic Monthly Press, 2001.

———. "Salt: The Second Chapter." *Irish University Review*, vol. 32, no. 1, Spring – Summer, 2002, pp. 95-99.

———. *Walk the Blue Fields*. Faber and Faber, 2007.

———. ———. Black Cat, 2008.

———. ———. Faber and Faber, 2008.

———. *Foster*. Faber and Faber, 2010.

———. *The Forester's Daughter*. Faber and Faber, 2019.

———. *Small Things Like These*. Faber and Faber, 2021.

Luppino, Claudia. "The Old and the New in Claire Keegan's Short Fiction." *Journal of the Short Story in English*, no. 63, Autumn 2014, <https://journals.openedition.org/jisse/1507>

McCann, Philip. "Murder, madness and chickens: Claire Keegan's first

collection of short stories, Antarctica, is an exciting exploration of today's global provincialism." *The Guardian*, 19 Dec. 1999, <https://www.theguardian.com/books/1999/dec/19/fiction.reviews>

Murakami, Haruki. ed. *Birthday Stories*. The Harvill Press, 2004.

———. ———. Vintage, 2006.

O'Hagan, Sean. "Claire Keegan: 'Short stories are limited. I'm cornered into writing what I can.'" *The Guardian*, 5 Sep. 2010, <https://www.theguardian.com/books/2010/sep/05/claire-keegan-short-story-interview>

キーガン、クレア。岩本正恵訳『青い野を歩く』(EXLIBRIS)。白水社、2009年。

橋本槇矩。「解説」。橋本槇矩編訳『アイルランド短篇選』(岩波文庫)。岩波書店、2000年。

村上春樹編訳。『バースデイ・ストーリーズ』。中央公論新社、2002年。

———. ———. (村上春樹翻訳ライブラリー)。中央公論新社、2006年。